

## 座談会

# “子どもたちが主役” —地域に学校支援の輪を広げるために—

東京都教育委員会は心豊かな青少年を育成するため、地域住民が主体となって学校教育活動を支援する「地域教育サポート・ネット事業」をモデル事業として展開しています。

そこで、このような取組をさらに充実・発展させるため、各地で実践に関わっている学校の先生やNPOの方々を中心にお集まりいただき、それぞれの立場から取り組みの成果や課題などについてお話いただきました。

### 【出席者】

- |                    |                             |
|--------------------|-----------------------------|
| ●生重幸恵（いくしげ・ゆきえ）さん  | 杉並区教育委員会学校教育コーディネーター        |
| ●稲田百合（いなだ・ゆり）さん    | 小平市立小平第六小学校長                |
| ●塩野敬祐（しおの・けいすけ）さん  | ボランティア・市民活動学習推進センター“いたばし”代表 |
| ●島野浩二（しまの・こうじ）さん   | 「夢育支援ネットワークセンター」代表（三鷹四小）    |
| ●福原冬彦（ふくはら・ふゆひこ）さん | 立川市立若葉小学校教諭                 |
| ●堀越幾男（ほりこし・いくお）さん  | 足立区教育委員会教育改革推進課社会教育主事       |
| ●嶋崎政男（しまざき・まさお）さん  | 杉並区立天沼中学校長　〔司会〕             |

【司会】司会の嶋崎です。今回の座談会の目的は、地域と学校の連携をすすめるための実践に関わっている先生方やNPOの方々にお集まりいただき、地域に学校支援の輪を広げていくための課題について意見交換をしようということです。最初に皆様の活動をご紹介いただきながら、その成果と課題についてお話しください。

## Dreams Come True ～ 子どもたちが憧れのおとなたちに出会う機会をコーディネート ～

【生重】 私は杉並区で「学校教育コーディネーター」という仕事をしています。総合的な学習の支援や休日の子どもの居場所づくりなど、学校の先生たちのニーズを伺いながら、人材の紹介や活動プログラムの提供などを行っています。いわば地域社会と学校との橋渡し役をしています。課題によっては、企業とオファーをとって、どういう形で関わっていただけるかということをつめた上で、それぞれ学校が望んでいる方たちと出会うよう、学校の立場と学校に入っていた方たちの気持ちの両方を調整した上で、コーディネートすることが、私の仕事です。

例えば、“Dreams Come True—夢を叶えたおとなたちに出会おう”という名前の、「カリスマ美容師に会いたい」とか「スポーツ選手に会いたい」という中学生の希望に基づきながら、職場体験先を紹介するという企画などに取り組んでいます。子どもたちが実際に憧れのおとなに出会ったことで、自分の将来の夢を描き、それによって学習意欲が向上するというケースが多く見られます。学校支援活動を行ってくれる人たちをいかにして養成するかということが現在の課題です。

【稲田】 私の学校がある小平第二中学校区では、1つの中学校と3つの小学校が協力し、「あなたの力を学校に」ということで「学校支援ボランティア養成講座」に取り組みました。これまでは、近隣の大学の学生ボランティアや保護者、地域の方々のご協力をいただいていたのですが、この



講座を通じて中高年の方々もボランティアとして学校に協力していただけるようになりました。

今までは、地域と学校とのコーディネートは管理職が中心でしたが、講座をやることで地域のコーディネーターが育ってきています。将来的には地域の方にコーディネート役を担ってもらい、学校も地域も活性化するといったと考えています。それとこの「地域教育サポート・ネット」の活動を通じて地域の方々のご協力をいただき、学校の中にもたくさん入っていただいたことで、教員の意識がものすごく変わったということも大きな成果です。今後の課題は、地域の人々の中からコーディネーターを養成していくことでしょうか。

## 地域の思いが学校にうまく伝わらないのはなぜ？

【塩野】 板橋区で総合学習に関わる「地域教育サポート・ネット」の事務局を委託されている、「ボランティア・市民学習活動推進センター『いたばし』」から参りました。板橋区は中学校区単位ではなく、区全体の総合学習支援の窓口を私どもの団体が引き受けるという形をとっています。具体的な活動としては、総合的な学習の時間を支援する地域団体や企業のガイドマップの作成、区内の学校からの要請に応える形で人材やプログラムの提供を行っています。区内に90校近くある学校のうち、約3割強の学校に関わってきました。また、コーディネーターの研究会や大人の学びと子どもの学びをつなげる「学びの広場」というプログラムも実施しました。

この1年間の取り組みを振り返ってみて、子どもたちが日頃接したことのない地域の大人たちとの出会いを通じて、生きる力を学べたのではないかと思います。

課題としては、私たちの団体の思いと学校の先生方の意識にまだまだズレがあるので、これをどう埋めていくかということです。



塩野さん「先生と私たちとの意識の共有化ができないかな。」

【島野】 三鷹市立第四小学校における活動を基盤に結成された「夢育支援ネットワーク」の代表を務めています。三鷹四小では学校の教育活動を支援してくれる人材を「コミュニティ・ティーチャー」（総合的な学習の時間への支援）、「学習アドバイザー」（学校の授業のアシスタント）、「きらめきクラブ」（クラブ活動の運営者）という3つの分野に分けて活用しています。



島野さん「学校とは別組織として『夢育支援ネットワーク』を立ち上げました。」

私たちが「夢育支援ネットワーク」を立ち上げたのは、校長が代わってもこういった多様な教育活動に地域の側が継続的に関わっていきたいという思いがあったからです。これまでの三鷹四小の活動は、学校長のリーダーシップに負うところが大きかったのですが、これからは私たち地域住民が人材の掘り起こしや活動プログラムの提案などを主体的に取り組み、学校とは別の組織としてやっていきたいと考えているところ

です。この仕組みを三鷹全小・中学校に広げたいと思っています。

## とにかく子どもたちを「地域」に出そう！ ～地域とともにつくる総合学習～

【福原】 立川若葉小学校から来ました。僕のところは学校の中から教員たちが力をあわせて、地域の方々と一緒に子どもたちを育てていこうよというスタイルで取り組みを始めています。地域の方々を学校に迎え入れるきっかけとなったのは「ふれあいフライデー」という取り組みでした。これは、学校の近くにある団地のお年寄りを招いて一緒に給食を食べようというものなのですが、これが大盛況で、順番待ちも出ているほどです。そこに参加してくれた方が自然と学校支援ボランティアとして関わってくれるようになっていきます。

総合的な学習の時間は「地域とともにつくる」というコンセプトの下、子どもたちがとにかく地域に出て、自分たちで課題を見つけ出せる取り組みを目指しています。課題は、子どもたちをどんどん地域に出そうと一人の教員が考えても、他の教員の意識が変わり、学校としてのコンセンサスが形成されるようになるのには4～5年くらいかかるということです。教員の多くには「地域に振り回されるんじゃないか」というイメージを未だにもっています。しかし、子どもたちがどんどん喜んで地域に出て行き、地域の人たちと関わりをもち、思いやりの心が育ってきているのを目の当たりにすることで、教員の意識も徐々に変わってきています。



福原さん「子どもたちが豊かに生きるということを目指してやっていきたいですね。」

【堀越】 足立区から参りました。私たちのところは、地域教育サポート・ネット事業を実施する中学校区のなかに、文部科学省の「コミュニティスクール」の実践研究校（足立区立五反野小）



堀越さん「ネットワークの中で、問題や成果を情報交換しています。」

を抱え込むという形で地域と学校の協働の取り組みを進めています。足立区では、地域教育サポート・ネットの活動を担う中心に連絡会を設置し、各校の「開かれた学校づくり協議会」等のメンバーを据え、学校間の連携活動をすすめようというプランをつくっています。現在は学校間のネットワークの基盤が立ち上がったところです。今後は学校図書館ボランティアの交流であるとか、学校支援人材バンクづくりとかの活動を展開していきたいと考えています。

【司会】 みなさまどうもありがとうございました。では、今までの話を聞いていて、この方の話をもう少し聞きたい、こうしたらどうですか、もしかしたら役に立つかもしれませんよ、ということがあれば、ご自由にご発言いただき、第二部として意見交換をしたいと思います。いかがでしょうか。



【稲田】 先ほど福原さんから、教員の意識が変わるには5年くらいかかるというお話がありました。小平6小で最初にお店番体験を始めたのが5年前です。そのときは、協力していただけるお店を探すのに校長が一軒一軒お店まわりをしたんです。ところが協力してくれるお店の方たちから「こういうことで困っているんですよ」「孫が来てくれるようで楽しみにしています」というような声を聞くたびに先生たちの意識も変わっていくんですよ。先生たちも地域と関わることによってどんどん成長していくんです。教員は今まで、こうした地域と連携してやるという経験が少ないわけです。それを初めてやっているというのが現状です。

## 「教えたがりの大人」・「丸投げ教師」が子どもの成長を妨げる

【福原】 実は、地域と関わることで心配していることがあるんです。総合的な学習の時間の効果を高めるために必要なことは、子どもたち自身の手で課題を発見し、自分たちで学びをつくりあげるといことです。それを妨げるのは、何でも子どもたちに教えたがる大人と、何でも教えてくれる親切な人だからその人に全部任せてしまえばよいといういわば「丸投げ」教師の問題です。その点では単に地域に出ればよいというわけではなく、教師の側は、学習の質に徹底的にこだわりながら、地域の活用法を考えていく必要があるんです。

【司会】 先ほど、学校との連携がうまくとれないという話をされていた塩野さん、この点についてはいかがお考えですか。

【塩野】 私たちの団体の支援を希望する多くの学校は、総合学習をどう進めたらよいか分からない学校のような学校です。学校単位で十分に地域と連携を図っている学校からの協力要請は少ないんです。やり方がわからないからこそ「丸投げ」してしまうのではないのでしょうか。

【堀越】 見方を変えれば、受け入れる地域や企業の側にも総合的な学習の時間の意味を理解してもらうことも必要なのではないのでしょうか。

【司会】 いま、企業側にも学校の教育活動の意味をわかっていただく必要があるという話もありますが、生重さんはどうお考えですか。

## 学校のリズム・地域社会のリズム・企業のリズム……リズムの違いを互いに意識すること

【生重】 まず第一に先生方をお願いしたいのは、総合的な学習の時間をはじめとした教科外の教育活動に対しても、子どもたちに何を学ばせたいかという明確な目的意識を持っていただきたいということです。それをはっきり伝えていただけたならば、コーディネーターはどんな要求にも応えるように頑張ります。そうでなければ、地域や企業との橋渡しをしても意味を成しません。

ただ私が学校と地域や企業の間で立つて思うことは、学校には学校のリズムがあり、地域社会には地域社会のリズムがあり、企業には企業のリズムがあるということなんです。その違いをお互いに意識しあってほしいということを強く感じています。もちろんその中心



生重さん「子どもたちが目的や夢を持った形で学習意欲を向上させる機会になればいいな。」

には子どもたちがいることを忘れずに。そのような関係を築き上げることができれば、子どもたちが学ぶ意欲に満ちあふれ、自分の夢に近づいていけるような学校生活が現実のものになっていくのではないのでしょうか。

【司会】 企業の立場からの見た捉え方というのはいかがでしょうか。島野さんご発言願います。

【島野】 私はケーブルテレビの会社をやっているんですが、「職場体験」などの機会が多くの子どもたちがうちの会社にやって来ます。企業の側には「お子様をお預かりする」みたいなやや遠慮がちな意識があります。しかも単発で短時間というケースが圧倒的に多い。それだと子どもたちに何をさせたらよいのかわからないまま時間が過ぎてしまいます。本当は、子どもたちが「何をやりたいのか」を見つけてあげたいのですけど。

【司会】 少し話しを変えますが、地域の方たちが学校支援活動を行う範囲というものをどのように捉えたらよいかについてご発言をお願いします。

## 中学校区を1つの単位として学校支援活動を考える

【塩野】 私たちの活動は板橋区全体をカバーしていますが、本日のお話を伺っていて、学校単位、まあ中学校単位でもまとまりといったレベルでの地域を1つのユニットとしてとらえて、学校支援の形を考えるのが望ましいかなということを感じました。

ただ、学校支援にはいろいろな形があってもよいわけで、環境問題とか国際交流といった分野では私たちのような広域的な団体のネットワークが力を発揮するというケースもあるかとは思います。

【稲田】 私もそのとおりだと思っているんですよ。小平での取り組みも中学校区単位で行っているのですが、小学校や中学校区単位でその地域の学校を支えるというのが基本だと思います。

たとえば、地域教育サポート・ネットの活動を続けていく過程でこんなエピソードがありました。5年ほど前から子どもたちのお店番体験を引き受けてくださっていた地域の商店街にお客さん減少しているのを見て、地域の子ども会が自分たちで自分たちの地域を興そうと



稲田さん「地域の方々の話を聞いた  
びに、先生方の意識が変わっていった  
んです。」

いう声があがってきたんです。「助けてあげたい」という子ども会の発想を私はとても素晴らしいと思いまして、コーディネーターの方たちと相談したところ、近隣の4つの子ども会がこの商店街を盛り上げるために、少しでもお客さんが来るように何かやってみようというわけです。それに学校側も協力をしはじめて、「小平よさこい」を子どもたち100人で、その商店街で踊ったんです。地域の自主的な動きに学校側がバックアップするという形ができたことが私にはとても嬉しかったんですよ。

## 子どもが接着剤となって、地域の大人たちをつないでいく

【福原】 僕自身も成長が鈍かったのか、なかなか気づけなかったのですが、地域というものは物でもなく、建物でもなく、道路でもないってことに。子どもたちと活動を続けてきてよう



やく「地域とは“人そのもの”だ」ということに気づいたんです。子どもが接着剤になって大人をくっつけていくんですよね。

【司会】 みなさん、いろいろお話いただきありがとうございます。では最後に一言ずつお願いします。

【堀越】 地域からの学校支援というテーマで話をしてきましたんですけど、地域側からすれば学校側からの地域支援というのも併せて望んでいるだろうと。そういう意味で学校と地域の間には双方向の関係を築いていく必要があると思いました。

【福原】 みなさん方が学校教育を理解しようと思ってくださっていることに、正直びっくりしました。地域や企業の人たちとがっちり腕を組んで子どもたちを育てることができる学校が生まれるという期待に胸を膨らませています。

【島野】 今日、一番感じたことは、私たちは先生という方々、あるいは学校という組織、風土をよく知らないということです。また、コーディネート活動を行う場合は地域地域の特性を生かしていくことが大切なんだということを強く感じました。

【塩野】 子どもの学びの主体性というものを重んじるのか、例えば総合的な学習の時間だとすれば、私たち地域の側はその総合的な学習の意味を、きちっとわかったうえで関わらなければいけないと思いました。そういった意味からも学校と目的意識を共有化していくことが私たちの活動のステップになるのではないのでしょうか。

【稲田】 今後この活動を続けていくために、地域に生まれたばかりのコーディネーターの活動をどのように発展させていくかがポイントとなっています。コーディネーターの活動が NPO 化すれば続くと思うんですよね。そんなことを思い描きながら来年度もがんばっていこうと意を新たにしました。



嶋崎さん（司会）「学校支援の輪がどんどん広がっていくことを願っています。」

### 先生と子どもたちの意欲があるところに「学校支援の輪」が広がっていく！

【生重】 みなさん方のお話を聞いていて痛切に感じたことは、「やらねばならぬ」という義務感で行動しようとしたときには、学校支援活動ひいては子どもたちの支援活動の魅力は全くなくなってしまうということです。

また、私たちの学校支援活動は、先生と子どもたちが意欲的に学習に取り組む姿勢があつてはじめて成り立つんだよということを、改めて申し上げておきたいと思います。

【司会】 やはりとても大事なものは、学校と地域の双方向の関係づくりをすすめていくことですね。今日はどうもありがとうございました。